

□講義科目（基礎科目）

科目名	発育発達学特論	2単位
担当者	吉岡隆之	
テーマ	健常者および障がい者の枠を超えて発育発達現象の評価法を確立し、スポーツ実践の適時性について考究する。	
科目のねらい	<p><キーワード> ①発育発達学研究の方法 ②発育発達現象の評価法 ③障がい者スポーツと発達</p> <p><内容の要約> 発育発達学は、乳幼児期、学童期、青年期および老年期にわたる発育発達に関する課題を明らかにし、それらを解決し、すべての人々の健康の保持増進に寄与するための科学である。日本人の身長最大の発育年齢は戦後急速に若年化したが、近年その傾向は緩やかになり、定常状態となっている。最大発育年齢が若くなるということは、思春期が早く訪れることを意味している。この体の発育に対してこころをはじめとした発達が同時進行すれば問題はないが、必ずしもそうではないようである。そこで発育発達に関する現代的課題を明らかにし、課題解決に向けた手法について疫学的アプローチを基に新たに学修する。</p> <p><学習目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 発育発達という現象が、どのような条件や要因によって規定され、また影響されるのかについて体系的にとらえ、発育発達に関する現代的課題を明らかにすることができる。 2. 人生90年時代を迎える中で、すべての人々が生きがいを持って生活できる共生社会を実現するために発育発達学の立場から寄与できる。 3. 過度のスポーツ実践は、取り返しのつかない身体的、精神的な負担を伴うことにも十分配慮し、スポーツ実践の適時性についても常に配慮することができる。 4. 乳幼児期、学童期および青年期の身体発達を主に扱うが、子ども達の発育発達に関する課題解決が、健常者および障がい者の枠を超えた普遍的なスポーツ実践につなげることができる。 	
授業の進め方	第1回 現代の子ども達の健康課題と発育発達 第2回 身体発達の概観 第3回 身体発達の課題（疾病との関わり） 第4回 身体発達の特徴（生涯保健との関わり） 第5回 健常児および障害児の運動能力の発達と加齢変化 第6回 エネルギー代謝の加齢変化 第7回 筋力の発達とトレーニング効果 第8回 持久力の発達とトレーニング効果 第9回 調整力および柔軟性とトレーニング効果 第10回 障がい児の運動能力の発達と加齢変化 第11回 障がい者のトレーニング効果 第12回 身長の最大発育年齢の年次推移 第13回 思春期の健康とオーバートレーニング 第14回 個々の成熟度に応じた発育発達現象の評価 第15回 発育発達研究とスポーツ科学との関わり	
事前学習の内容 学習上の注意	履修上の注意 予習：発育発達現象に関わる課題について、あらかじめ学習しておくこと。調べたことについて30分程度のプレゼンテーションができるよう準備しておくこと。 復習：授業で得られた知見や疫学的アプローチを他分野でも生かせるようにすること。	
本科目の関連科目	身体運動学特論、スポーツ医学特論、スポーツ心理学特論、スポーツ共生社会特論	
テキスト	樋口満、佐竹隆著、高石昌弘（監修）からだの発達と加齢の科学、大修館、2012	
参考文献	J. M. Tanner 著、林 正（監訳）「成長のしくみをとく - 胎児期から成人期までの成長のすすみ方 -」、東山書房、1994 竹内義博、大矢紀昭「よくわかる子どもの保健」第3版、ミネルヴァ書房、2016	
成績評価方法と基準	毎回の授業の際の発表（30%）、文献購読の達成度（30%）およびデータの分析及び考察（40%）で評価し、総合評価60%以上を合格とする。	